

タダの指導に依存してゐる限りには限界あり

帯広展の会期中の7月7日に、北海道土を考える会が十勝川温泉

笹井ホテルで第46回総会を開催するとともに、帯広畜産大学の谷昌幸教授を講師に招いて「減肥に向けた取り組みについて」と題した勉強会を行なった。

本誌7月号の特集は、2008年9月号の特集をそのまま再掲したものであった。再掲を思いついたときもそうだが、谷氏の講演を聞きながら、農業経営が昔から変化していない実態があることに複雑な気持ちになった。

pH、CEC、EC、塩基飽和度、可給態リン酸など、土壌の基本用語が出てくるため、「分かる？

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

分かる？」を連発する。谷氏はこうした講演をこれまで何度も繰り返しやってきて、残念ながら農家のほとんどはその関連性とその理解のもとで適正施肥とは何かというものの基本を理解していない。だから、小中学生向けの講義のように理解度を確かめざるを得ない。それだけではなく、「長年農業をやってきて、こんなことをまだ覚えていな

いの？」という若干の皮肉も込められているのかもしれない。

当日、そこにいた北海道土を考える会のメンバーは谷氏の冷やかしをかわし、ニヤニヤ笑いながらももう少し高度な問いを投げかけていた。

この程度の知識は本誌読者なら知っていて当然だと思うが、土壌の化学性を十分に理解できていなかったとしても農業経営者として恥じることはない。それは専門家に任せて経営者自身は経営判断をすればよいのである。

また、本誌読者の多くもそうであるが、機械オタクである。それは趣味の問題であるからよいのであるが、己が優れた機械オペレーターであることに満足し、そこにとどまったままになっていないかという反省も必要なのではなからうか。農業経営者の役割とは何かと。

長く農業界で「美德」とされてきた家族経営でひたすら経験主義に陥る中で働き続ける。経営者の役割とは何か、外部にある知恵を自らの経営に活かすことをしてこない。知識や情報は役所や農協が

タダで与えてくれるものだと思っ
て疑問を抱かない農家も多い。

北海道の土壌研究組合のSRUのメンバーは、海外の土壌検査機関に土壌分析を頼み、土壌コンサルタントの指導を受けて優れた経営を続けている。その分析やコンサルティングにかかる費用を聞いたら多くの農家は「そんなにかか
るの？」と尻込みするであろう。でも、SRUの経営を見れば答えは明白だ。

すでに、オランダや英国には農水省という役所は存在しない。オランダでもかつては公的な普及員制度が存在していたが、今では農業経営者が依存する農業にかかわるさまざまなコンサルタントはすべて民間の専門家である。どの農場も各専門分野の複数のコンサルタントを雇っている。そして、忘れてならないのは公的な普及員制度を廃止してからオランダ農業の成長が著しかったということ。民間のコンサルタントは良い結果を出せなければクビになってしまう。

そんな海外の動向だけではなく、経営者自身が、外部の専門家や自分にはない能力のある従業員を雇うことを考えてみるべきだ。